東日本大震災における後方支援病院として～地域病院の役割～

（伊藤達朗. 全自病協誌 10: 1736-1738、2011）

2012 年 5 月 25 日、災害医学抄読会 http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/

1. はじめに

岩手県立千厩病院は岩手県南部一関市の東地域(医療対象人口約 52,000 人)の中核病院である。高度、一般医療のほか救急医療を担うと共に、医療と福祉・介護の連携を図りながら在宅医療の推進も図っている。発災前までは一般病床 110 床、常勤医師 6 人、平均入院患者数 102 人/日、平均外来患者数 238 人/日、救急患者数 14.5 人/日、救急車搬入 1,025 人/年であった。

2. 発災後

発災直後は施工中の透析・内視鏡・手術を中止・短縮し、即刻災害対策本部を設置し、病院の被害調査や情報手段の確認を行った。インターネット、携帯電話、メールは不通となったが、防災無線電話だけは県の施設及び県立病院間で唯一通話可能であった。

3. 患者受け入れ

発災直後のライフラインの状況、診療機能と施設被害状況から患者受け入れ可能と判断し、『患者はすべて受け入れる』、『トリアージによる高次後方病院への搬送』、『自主的な患者受け入れ』の 3 項目を基本姿勢とした。被災地からの入院患者は 3 月末までに計 136 人にのぼり、病院からの受け入れは 107 人(79%)であった。かかりつけの患者の入院もあり、在院患者数は一時 160 人を超えた。地域別入院患者数では気仙沼市が 57 人(42%)と最も多く、高齢者を中心とした脳血管疾患、呼吸器疾患、循環器疾患の患者や、HOT、人工血液透析の患者が多数を占めた。

4. 後方支援病院として機能できた要因

○検査が限られる状態で病歴と身体所見を頼りに幅広く診療を行える総合医が複数存在したこと。
○医療従事者のマンパワーの確保とチーム力が発揮されたこと。
○入院病床が確保されたこと。
○地域住民から多大な協力、支援があったこと。
○自治体(一関市)の協力があったこと。

5. 今後の課題

○発災直後の情報収集と通信手段の確保。
○地域病院の役割と高齢者の医療や介護対策を新たな災害医療計画に取り入れること。
○被災地病院の積極的な業務軽減。
○診療材料の確保。
○職員の食糧支援とガソリンの確保。
○非常電源配電場所の適正化。